



「柳城」第38号 発行所 名古屋柳城短期大学 名古屋市昭和区明月町2-54 発行者 田浦 武雄

# 聖母マリアにクリスマスの メッセージを聴く！

理事長 法 用 渉

今年四月から、大学の英語名が新しく採用されたことに気付いている人は案外少いのではなからうか。セイント・メアリーズ・カレッジ・ナゴヤという名がそれで、訳すれば聖母マリア短期大学ということになる。日本のキリスト教（特に聖公会）関係大学では古くからもっているものが多く、例えば、立教大学はセイント・ポールズ・ユニヴァーシティ、立教女学院はセイント・マーガレットなどで、主に外国向けに用いられ、後には日本社会でも一般に知られるようになったものである。

今更、セイント・メアリーズ・カレッジを持ち出すのは、クリスマス物語には聖母マリアの存在が不可欠だからである。聖書に記されているキリスト誕生の物語（この物語を土台にして伝統的クリスマスの聖劇が作られ、演じられて来ている）の第一幕は、聖母マリアの受胎の告知の場面である。ナザレの村のおとめマリアに、天（神様）から遣わされた天使ガブリエルが現われ、「あなたは身ごもって男の子を生むが、その子をイエスと名付けなさい」と告げ、マリアのとまどいにもかかわらず、このことは、人間的なことが原因ではなく、天上の神様の決定であって、その神様の生命の働きによって男の子を生むことになるのだと説明される。「わたしは主（神様）のはしため（主人に仕える人）です。お言葉どおり、この身に成りますように」と答え、そのように神の子イエス・キリストを生むことになったというのがこの物語である。（『ルカによる福音書』一章26―38参照）。実に感動的なシーンである。自らをただこの世に



ある一人の女性として見るだけでなく、ガブリエルを通して神様の世界にその場が与えられているばかりか、その神様の生命をこの世に生み出し、育てるものとされた光栄をまどいと畏れの気持をもつ



て受け入れていたのである。母親として子どもを生み育てる人生は、単なる人間の動物的な本能を超えた次元の生命を含んだ営みであるし、その神的な子どもも成長に仕える保育者の働きも同じ神聖な次元の生命に関わるものである。それは一つの職業というよりも天職と呼ばれるにふさわしい。この聖母マリアは、この母親としての生のすべてを生き抜き、キリスト教世界では理想の女性、神の母とさえ呼ばれ、崇敬の対象として生きつづけ、多くの奇蹟と共に人々の心に尊敬と親しみを保ちつづけているのである。名古屋柳城短期大学がこの世界的な聖なる女性像の担い手をその校名にいただけることを大いに喜び、感謝し、誇りとしていただきたいと願っている。

今、『台所のマリアさま』という物語を伝えたい。現代英国の作家ルーマ・ゴッデンによるお話である。共働きの家に、小学生の兄と妹がいて、その兄は部屋からほとんと外に出たこともなく、他人を入れることもなかった程の内向的な性格であった。その家にマルタというお手伝いさん（東欧からの難民の一人）が来るところから物語は動きはじめる。家族には殆ど口もきかなかったこの少年が、マルタとは最少限度だけ会話するようになった。マルタのやわらかい物腰やきびきびした動作に少しずつひかれていき、やがてマルタの心に潜む寂しさに気付くようになる。「なぜさびしそうな顔をするの」との問いにマルタは「この台所にはマリアがいないの」と答える。ここから少年のマリア探しははじまり、ふとした事から飛び込んだ教会の中で、あの有名な「黒いマリア」に出会い、しかも、それこそマルタの求めていたものと同じ、次にそのマリアを作る仕事へと少年は動いていく。自分の大切にしてきた絵の額ぶちを用い、苦手であった反物屋のおばさんに布ぎれを乞い求め、妹の助けを借りてまでマルタへの贈り物を完成していく。勿論その結末は、少年自身の変心だけでなく、両親との和解、それにもまして、マルタの喜びと祈り、そして少年への感謝をもって物語が終る。

このような聖母マリアへの崇敬が、私たちの学校にも満たされるように祈りたい。

# 創立記念礼拝・音楽研究発表会・墓地礼拝行われる

一九九六年十月二日(水)、柳城学院の創立記念日の関連行事が行われた。

これまで創立記念日は、十一月一日としていたが、それは、創立者の魂を覚え記念するという意味で、諸聖徒日に主旨として近いという理由からその日が選ばれていたが、記念日の主旨からいえば、柳城の教育が正式にはじまった日

を考える方が相応しい意見が提案され、ある資料に九月三十日にはじまったことが記されていたことから、それに近い日として十月の第一水曜を創立記念日と定めたのである。

今年には柳城学院の創立98周年の年にあたり、二年後に百周年を迎え、少しずつ準備が始まっている。

★ 創立記念礼拝はいつものように体育館で十時より開始された。式の中で田浦学長より式辞、法

用理事長より祝辞をいただき、また聖歌の「うるわしの白百合」では、全員が二部に分れて合唱をした。また、同じく式の中で、永年

動統表彰が行われ、柳城幼稚園園長の佐藤智代美先生が勤務20年の、また監事の石川哲朗氏と事務職員

**プログラム**

I 作品発表

- 自転車に乗って、安藤 昌子作曲
- 静かなひと時
- ワルツ

II 4つのバラード作品10

- 第1曲 ニ長調
- 第2曲 ニ長調
- 第3曲 ロ長調
- 第4曲 ロ長調

III マ・メール・ロア

1. 眠りの森の美女のパヴァーヌ
2. 親ゆび小僧
3. バゴダの女王レドロネット
4. 美女と野獣の対話
5. 妖精の国

IV

- アヴェ・マリア
- 歌劇「清教徒」より “あなたの優しい声が”
- 歌劇「ラ・ボエーム」より “私が街を歩く”

V スケルツォ第2番・ロ短調・作品31

★

また今回は、式の終了後、各附属幼稚園の紹介が行われ、柳城幼稚園、瑞穂幼稚園、豊田幼稚園の園長先生が、各々幼稚園の様子と近況について紹介された。

★ 十五分の休憩をはさんで、音楽の先生方による音楽研究発表演奏会がはじまった。

今年新たに二人の非常勤の先生が参加され、安藤昌子先生の作曲による作品発表(ピアノは鈴木久美先生)に始まり、稲垣宏豊先生によるブラームスの四つのパレード、尾関香、鷲野真理子両先生による連弾でラヴェルのマ・メール・ロア、樋渡千鶴子先生独唱(塚田

都先生ピアノ)によるアヴェ・マリア他二曲、そして最後に梅村裕子先生のピアノによるショパンのスケルツォ第二番の演奏で幕を閉じた。

★ 普段の授業では見られない先生方の一面に触れて、学生たちの多くも感銘していたようである。

午後二時からには、八事にある日本聖公会中部教区・教役者墓地において創立者記念墓地礼拝が行われた。学生を代表して一年・二年各クラスの宗教委員と、教職員の

中から有志の方が参加され、マーガレット・ヤング先生をはじめとする創設者と心の中で祈り、対話の時を持った。

# 短大だより

## 柳城祭を終えて

十一月四日(月)・五日(火)の二日間、わたって開催された柳城祭について、その中心的メンバーとして尽力してきた柳城祭実行委員会と学生会を代表して、委員長と会長に、またその全体にわたって見守ってこられた学生生活委員長に各々ふりかえってもらうことにした。

柳城祭実行委員長 立松優子  
柳城祭に向けて、学生会のメンバーと共に、四月から半年間準備を進めてきました。最初は私自身何をしたらよいか分からず、スタッフを上手くまとめていくことさえできませんでした。しかし柳城祭が近づくにつれ、スタッフ一同みんなが楽しめる柳城祭をという願いを持ちながら、それぞれの役割に責任を持ち、精一杯取り組むことができました。

当日、スタッフから学生へ連絡が行き届いていなかった為、手違いがあったり、雨に降られてしまいうなど、様々なハプニングもあり予定通り企画を進めていくことができない場面も多くありましたが先生方や藤田さんの多大な御協力



昨年、先輩方の指示のもと、精一杯仕事を覚え、準備に取り組んできたつもりでした。しかし、自分が先輩という立場に立ち、指示を出してみると、知らなかったこと、分からないことが数多くあり、二年生は戸惑いを隠すことが出来ませんでした。ですから、色々な困難にぶつかり、苦労もしました。しかし、スタッフ同士、励ましあい、協力し合ってみんなの柳城祭を作ることが出来たと思っています。先生方や藤田さんの多大な御協力やスタッフの頑張りによって柳城祭は成功に終わることができました。後夜祭の後、学生から「楽しかった」という言葉がきけた時は、嬉しくてたまりませんでした。みんな完全燃焼できたと思います。



学生生活委員長 後藤卓郎

96年11月4日・5日の両日、第28回柳城祭は「天使が生まれる日」をテーマに、盛会裡に開催された。野外ステージ、体育館、校庭、教室に繰り広げられる多彩なプログラムを参加者は大いに楽しみ、悲喜こもごもの思いを残した後夜祭で、その幕を閉じた。

この二年間は、私にとってとても有意義なものでした。すばらしい仲間と出会い、過ごした時間はこれからの自分に必ずプラスになることだと思います。

思えば、昨年度の柳城祭の幕が降ろされたその瞬間から、新たなメイクドラマは始まった。ぎっしりとつまったカリキュラムのなかで時間をみつけ、寸暇を惜しんで会議を重ね、夏休みには合宿までして、綿密に企画を練り上げてきた学生会役員・柳城祭実行委員諸君のひたむきな努力があったこそ、今年も立派な柳城祭を開くことができた。

当日の運営は勿論、前後数日に

及ぶ準備と後かたづけの様子を垣間見て、私は大きな感動を覚えた。特に「祭り」を終え、後かたづけを終えてから、大変疲れているであろうのに、校庭、教室、体育館、クラブ室、ロッカー棟からトイレのすみずみまで、笑顔さえみせていねいに清掃していた姿が、とてもさわやかで印象的だった。

学生会役員・柳城祭実行委員の諸君、本当にご苦労様。そしてありがとう。今回は、昨年の卒業生を中心に同窓生の参加が多かったこともうれしかった。最終日、勤務を終えてから後かたづけに駆けつけてくれた先輩もいて、どれ程力強い支援になったことか。こうした絆に結ばれて、柳城の伝統は受け継がれ育まれることを実感した。最後に参加していただいた全ての人々に心より感謝を申し上げます。

96年度、二年生のための幼児教育ゼミナールは、9月26日・27日の二日間、ヤマハリゾートコンベンション「つま恋」において行われました。講師にはリトミック研究センター会長・横浜さくら幼稚園園長など、多方面でご活躍中の岩崎光弘先生をお迎えし、リトミックの基礎を中心に指導いただきました。今回は前以て話し合っ

### 幼児教育ゼミナールを振り返って

学生たちの意見を取り入れ、リトミックの他、会場の環境を生かしての自然散策や軽いスポーツ、キャンプファイヤー、グループ討議、そして交流タイムを計画していましたが、初日の天候はあいにくの雨となり、みんながたのしみになっていたキャンプファイヤーは中止となってしまうました。しかし、さすがに保育者を目指す人達、すぐにゲーム大会に切り替えてたのしく盛り上げてくれました。二日目はお天気にも恵まれて計画は順調に進められ、広い体育館で講師の岩崎先生より実技とお話しを織り交ぜながら易しいものから高度なものへと内容が進み、学生からは、実際に体験できて分かり易く親しみ易かったことと共に、ピアノにあわせて体を動かすことが自然にたのしくできたことや象・うさぎなどをイメージして表現する中で、今更ながら自分の表現力のなさに驚いたりしたこともあったようですが、「いろいろな仲間と関わられているいろいろな表現を見ることができた。また、手をつなぐことではじめて話した人とも親しみがわいて仲よくなれ、特にダンスのときなどはとてもたのしくできました。こうしたたのしみの中にも、音を聴くこと、歌うこと、拍子をつかむことなどいろいろな要素がちりばめられていた。」「全員で実際に体を動かして覚えることができ、知っている曲に少しアレンジを加えるだけですばらしいリトミックの伴奏として使えることを知った」など、これからの自分達にとって役に立つことばかりでも勉強になったと感想が述べら





れていました。特に学生と一諸に演奏して下さったグラビノーバの思ひもかけぬ美しい即興演奏には多くの学生が魅了され、講演後、質問などに残った人達は個々にグラビノーバ演奏の手ほどきをいただし、簡単なテクニックで誰にでもたのしめる演奏を何人もが自ら体験することができ、大変感激していました。また、一日目にはお預けになっていた自然散策やスポーツなどもたのしんだ人もいたように、それぞれが思い思いに有意義な時を過ごし、仲間や教職員との親睦も深まったことと思います。また、今回のグループ討議は「よいよい保育者になるために」をテーマに四クラスを混合にしてグループを作ったことで、日頃あまり友好のない人の意見や考えを聞く機会となり、「他の人の話を聞いて、



自分と同じことをみんなも疑問や不安に思っているのだということばかりホッとしたりと同時に、同じ疑問や不安を抱え、どうすればよいかを話し合える仲間がいることと、話し合える場が持てたことを大変心強く感じた」と感想を述べ、日頃の心配事や不安、よろこびなどを共感し合いながらの熱心なやり取りを通して自分の見直しや残る学生生活への心構え、保育に対するさらなる意欲が持てたと述べられていたのが印象的でした。こうして豊かな学びを得て、静岡名物もしっかり買い込み全員無事に帰宅の途に着くことができ、少数の欠席者と多少風邪気味で気分が悪くなった人もいましたが、何とか無事終了することができましたことを報告致します。

(長根記)

### 44年卒クラス会開かれる

オリンピックの年に、クラス会を開こうと前回決って、二回目の会が、九月一日に行なわれました。いつまでも若々しい高田澄子先生をお迎えし、懐しい仲間が集まりました。卒業して二十七年、その隔たりを全く感じさせない程、学生時代の思い出などに話が弾みましました。それぞれが年を重ね、仕事に興味に家庭生活にボランティアにと、さまざまな思いを持って頑張っていることが伝わり、とても嬉しく、また、自身の励みにも

### 関西支部会開かれる

去る九月二十三日に、久々に関西支部会を開く機会が与えられ、楽しい一時を過しました。東京から応援の三名を迎え、阪神大震災の災害を乗り越えた関西在住の同窓生十二名が参加し、芦屋聖マルコ教会付属の愛光幼稚園の園舎を会場に、なつかしい顔を揃える事ができました。幼稚園周辺は、芦屋の中でも最も被害のひどい所で、復興にはほど遠い更地の状態が一面に広がっている地域です。その中で、九七才の鳥居なつ先生が背中にリュックを背負い、大阪の老

### 同窓会だより

なりました。学生時代には、坂東きく学長の厳しいご指導の元、密かな勉学に窮屈さを感じてしまったが、その厳しさが、複雑になった社会の中で、人として思いやりの心を忘れない『愛をもって仕えよ』の教えとして、今、生きている気がしています。改めて、柳城を卒業した事、そして良き友と同じ時を過せた事に感謝いたしております。今回は、大震災の地からも二人参加され、また、柳城に永年関わられ、一人一人を見守って下さった高田先生が来年三月、勇退されるとのことで、特に意味深いもの

人ホームから、お一人で参加して下さったには、私共一同感動し大喜びしました。リュックの中には、団栗や折紙の作品が園児へのお土産として入っておりました。以来先生と園児との間で、暖かい心の通い会う文通が続いております。八十年間の現役時代の体験を通してキリスト教の宣教の場としての幼児教育の大切さを、大きなはつきりした口調でお話し下さり、一同大変励まされ勇気づけられました。関西も、これを機会に、一年に一度位は励ましの時を持つという事になり、来年神戸での再会を約束して、散会致しました。

(小池洋子記)



(吉田正子記)

# 附属幼稚園だより

## 瑞穂 何事にも喜び、感動しながら



「いらっしやい、いらっしやい。」  
 「ステキな洋服はいかが?」「はい、これおまけです。」かわいい売り子さんが大活躍の「ブラザリア」  
 「。」お店屋さんの開店です。二期から子ども達の興味・段階に合わせて製作し、ためてきた商品。この日のためでなく負担をかけずにするため、自分の大切な宝物になるばかりでなく、小さいお友だちに大きい組のお兄さんお姉さんの姿はドキドキワクワクして映り、大きな刺激として次のステップの力となりました。  
 仲良しの瑞穂っ子は、色々な場面でもやさしい手を差し延べています。二人乗り自転車前の席に乗りたいたい三つ子ちゃん。押し合っ

## 柳城 毎日心はずませながら

「おもちの匂いがするよ。」たき火をしていると誰かが言いました。煙がおもちを焼く匂いを感じたのでしよう。「本当だ」と、周囲の子どもたちもおもちをほおばりながら口をそろえます。すると今度は、パチパチする音を聞き、「たき火が拍手してるよ」と暖かい火の傍で朝の会話が弾みます。豊かな感性で物事をとらえ、毎日が発見の子どもたち。そんな子どもをつぶやかに新鮮な気持ちと感動を覚えます。いつの間にかはく息も白くなり、だんだんと寒さに向かっている日々の中、子ども達は、瞳を

「おもちの匂いがするよ。」たき火をしながら園生活を送っています。輝かせながら園生活を送っています。神様から頂いた恵みに感謝し、静かな祈りの時をもつ収穫感謝祭を終え、アドベント・クラントのロソクに火がともりました。保育室の飾りも増え、いつの間にか一人一人の心の中にイエス様を迎える仕度が出来はじめ、クリスマスらしい気持ちが溢れてきます。キャロリング、トーンチャイム、そしてページェントの準備も進み、年長児は残りの幼稚園生活を惜しむ様に取りくんでいます。クリスマス祝会には、短大からハ

## 豊田 ともに育ちながら

子どもたちの生き生きとした活動の中にいるとなんでもなく通り過ぎることの中で、時々ふと心に呼びかける何かを感じます。あの子はこの頃どうしているのかしら：二〇五名の子どもたちと一緒に遊んでいるといういろいろなことがうかがわれます。そんなとき担任の先生に様子を聞いたり、他の先生たちと話し合い、互に理解の上での援助とは考えながら次への保育の目安とします。けんか早い子、落ちつきのない子、物静かで表情のない子、妙に良い子にしている

子：、教師に何かのサインを出しています。時々お迎えのとき家での様子を伺いお母さんと一緒に子育てについて考えます。毎日思いやり自分を出して欲しい、充実した時を過ぎて欲しいと願いをこめて、今日も朝早く元気に登園して一日が始まります。私のまわりに集ってきて「先生イエス様のおはなししてよ」「ハイハイ、今日のイエスさまのおはなしはね。」礼拝のときだけでなく、お庭の片すみでお部屋の廊下で、短い小さなお話にも耳をかたむけ、うなずいて満足気に遊びの中に走ってゆきます。クリスマスが近づき「くつやのマルチン」やいろいろのお話をしながら、一本ずつロソクに灯をつけ、心あたたかい日々をすごしています。



# 歴史資料室コーナー

図書館の隣にある教職員閲覧室（歴史資料室）に、「柳城創立百周年記念」（二年後）及び「短大設立五十周年記念」（七年後）を覚えて、以前から提唱されていた記念誌作成（現時点では図書委員会業務の一環として担当）スタッフが秋から配属されました。

このコーナーでは、純朴まじめで学習意欲も旺盛だった卒業生が、かつて母校で得た尊い体験、今も皆様の中に受け継がれている柳城スピリットの記録、古くから大切に保管された各種証明書、学園だ



去る平成八年十一月十六日(出)、平成九年度推薦入試が実施されました。

志願者は一五二名で昨年度より二二名減でした。この減は、他大学の面接日と重なったからだと考えています。

判定は、昨年と同じく、高校での評定と面接との総合判定によりました。面接は、これも昨年と同じく「グループ面接」を実施しました。私も今年度始めて面接を担当しました。一グループ三人の受

祈りしている毎日です。

『皆様にお願ひ！』古い写真や資料はコピーしてお返しいたしましたので皆様の大変な想い出の品々を歴史資料室へお貸しください。（寄贈していただけたらもっと有難いのですが）

主のお計らいによってこの業務が与えられました。感謝の心で、「記念文集思い出」原稿をワープロ打ちしながら、皆様が気軽に母校を訪れてくださるよう。お便り、近況、いろいろな情報を沢山お寄せくださるようにと期待に心を踊らせてつづ朗報をお待ちしています。（広瀬記）

験生を三人の教員によって面接しました。一グループの面接時間は二十分間です。

始めての面接体験から感じたことは、質問に対して、ユニークで個性的な答えが少なかったことです。「質問が悪かったかな」と反省しています。

グループ面接は、個人面接と比較して、受験生の個人差を比較することができ、選抜するのが容易です。しかし他方一人ひとりの持ち味を把握するのは困難のようです。

このようにして、九八名の合格

## 編集後記

今年もまたクリスマススの季節がやってきた。この時期が近づくと街もクリスマススの装いで一色となり、デパートはさながらひとつの大きなプレゼントのように、リボンのような垂れ幕がかけられたりする。木々の形をした照明や外套のえりをたてて歩く人の姿を見ながらクリスマススの訪れ、年の瀬を感じる人も少なくないだろう。

今やクリスマスはその本質的な部分が伝わっているかどうかは別として、国民の行事になってしまった。そのような傾向を半ばうれいなか、この時期になるとクリスマススの絵本が、しかもその中心である降誕物語を扱った絵本が必ず出版される。

マリアが天使からみ子の誕生のみ告げを受け、ヨセフといっしょにベツレヘムにロバに乗って旅に出かけ、人であふれるベツレヘムの、小さな馬屋の飼い葉おけでイエスを生む。その知らせを各々別のところで知らされた羊飼いと博士が、イエスの誕生を喜び拜みにやってくるという、よく知られたお話である。

このお話は周知の通り、『マタイ』による福音書と『ルカ』による福音書をいわばひとつにしてできたお話であるが、それがひとつ

になるプロセスで、語り手（または作者）の大きな想像力が働いている。例えば、ベツレヘムへの旅の際に、マリアが乗っていたロバのこと、二人が泊まる場所がなく

て仕方なく入った馬小屋のこと、また東の方からかけつけてきた博士が三人であること、ラクダに乗ってきたこと、これらのことについて聖書は一切語っていない。

私たちに今日与えられている、わゆる降誕物語は、大いに脚色された創作性の高いお話なのである。しかし私たちはこのことから、降誕の出来事が何か作り事のような信ずるに値しないような、そういう事柄として考えるべきではないだろう。むしろ『マタイ』による福音書と『ルカ』による福音書に書かれていることを熟読し、その両者をつきあわせ、「イエス様は一体どのように誕生したのか」ということを探求するなかで、この物語が誕生したと見るべきであらう。

今日の聖書学では『マタイ』も『ルカ』も必ずしもすべて史実通りではないことが明らかになってきている。私たちにとって大切なのは、イエス様が歴史的にどのような人生したかということよりも、イエス様の誕生が私たちにどのような意味をもっているかということであると思われる。（菊地記）